サーダウィ、ナワル／鳥居千代香訳『0 度の女：死刑囚フィルダウス』、三一書房、1973 年
ハビービー、エミール／山本薫訳『悲楽観屋サイードの失踪に関する奇妙な出来事』、作品社、2005 年
マフフーズ、ナギーブ／池田修訳『アルカルナック』、アジア経済研究所、1978 年
メルニーシー、ファーティマ／ラトクリフ川政祥子訳『ハーレムの少女ファティマ：モロッコの古都フェズに生まれて』、未来社、1998 年（原題は『越境の夢』）
ヤシーヌ、カテブ／島田尚一訳『ネジュマ』、現代企画室、1994 年

《英訳》
Badr, Liyana. *The Eyes of the Mirror*, Garnet Publishing Ltd: Berkshire, 2008.
Badr, Liyana. *The Balcony over the Fakihani*, Interlink Books: New York, 2002.
Darwish, Mahmud. "The Earth is Closing on Us", in *Victims of a Map*, Al Saqi: London, 2006.
Khalifeh, Sahar. *The Wild Thorns*, Saqi Books: London, 2005.
Khoury, Elias. *The Gate of The Sun*, Picador: New York, 2005.
Mosteghanemi, Ahlam. *Memory in the Flesh*, American University in Cairo Press: New York, 2003.
Rifaat, Alifa. *Distant View of a Minaret*, Heinemann: London, 1987.
Samman, Ghada. *The Square Moon*, University of Arkansas Press: Fayetteville, 1998.
Shammas, Anton. *Arabesques*, University of California Press: Berkeley, 2001.

（細田　和江　中央大学政策文化総合研究所・準研究員）

Jeroen Gunning. 2008. *Hamas in Politics: Democracy, Religion, Violence*. New York: Columbia University Press, xiv + 320pp.

イスラーム抵抗運動（Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya: Ḥamās, 以下「ハマース」）については、1987 年の結成以来、多数の研究がなされてきた。特に 2006 年 1 月にパレスチナ自治政府の立法機関である立法評議会の第 2 回選挙に参加し、パレスチナ解放運動（Ḥaraka al-Taḥrīr al-Waṭanī al-Filasṭīnī: Fataḥ, 以下「ファタハ」）に対して地すべり的勝利を収め、それに呼応して研究の数も急増した。その中で本書は、既存の先行研究を周到に整理した上で、著者自身の政治社会学的な理論的考察、ならびに長期に渡るフィールド調査の成果を総合し、ハマース研究における今日的な到達点を示す研究として高く評価できるものである。

著者ジェロアン・ガニングは、イギリスのアベリストウィス大学の「急進化と現代の政治的暴力研究センター」の所長代理であり、また同大学国際政治学部のテロリズム研究・中東研究の講師である。博士号をダラム大学から取得した著者は、ガザ地区やレバノンで長期にわたるフィールド・ワークを行ってきた。イスラーム主義の社会運動、特にハマースとヒズブッラー（Ḥizb Allāh）を事例に、民主化、宗教、暴力の相互作用を研究の中心として扱っている。

本書は、パレスチナにおける対イスラエル抵抗運動であり、イスラーム主義運動であるハマースを対象とする。1980 年代に武装闘争の準備、部分的な展開を行っていたムスリム同胞団のパレスチナ支部が、87 年のインティファーダ（民衆蜂起）に際して闘争部門として結成したのが同運動

である。翌年8月には綱領である『ハマース憲章（Mīthāq Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya “Ḥamās”）』を発表し、パレスチナの解放とイスラーム国家の建設を中心として、その目的、方法を表明した。

ハマースは結成当初から、インティファーダの主導権をめぐりパレスチナ解放機構（Munaẓẓama al-Taḥrīr al-Filasṭīnīya: Palestine Liberation Organization, 以下「PLO」）と競合し、パレスチナ政治における主要なアクターとして存在感を示してきた。特に1993年にイスラエル政府・PLO間で「パレスチナ暫定自治に関する諸原理の宣言（オスロ合意）」が締結され、翌年に先行自治が始まって以降も、対イスラエル武装闘争の継続を主張し、和平プロセスへの最大の反対勢力とみなされてきた。他方で、同運動はムスリム同胞団時代からの広範な社会活動関連諸組織とゆるやかに連携し、占領下の社会を支えてきた。和平プロセスの行き詰まりと2000年以降の第2次インティファーダの中で、ファタハに対して優勢となったハマースは、2004年から地方議会選挙に参加した。そして2005年のカイロ合意を経て、翌年立法評議会選挙に参加し、勝利するに至った。選挙は国際監視団に自由で民主的に行われたと評価されたものであったが、イスラエルと国際社会は「テロリスト」率いる自治政府に「制裁」を課し、ハマースの側もイスラエル承認などの条件を拒否したため、混乱が続いてきた。

このようにパレスチナ／イスラエル紛争と「対テロ戦争」の争点の中心にあって、ハマースに関する研究はしばしば政治的バイアスを伴う。そこには「ハマースはある一貫した特徴を持ち、それは変わることができず、今後変わることもありえないという見方」―― Klein が「静態的アプローチ（static approach）」と呼ぶもの［Klain 2007］――が散見される［e.g. Levitt 2006; Nüsse 1998; Stedman 1997］と著者は指摘する。

それに対し「本書はハマースが今後も存在し、変化に左右され、そして内部の矛盾は退けられるよりむしろ探求されなければならないという前提に立つ」（p. 3）とする。そこでハマース研究における方法論的課題と著者のアプローチが第1章「ハマースを研究することについて」で論じられる。著者はまず「静態的アプローチ」が典型的に見られる伝統的テロリズム研究者とイスラーム主義研究のうちの本質主義者の問題点を指摘する。第1に、彼らは二次資料に過度に依存し、フィールド・ワークやインタビューにほとんど依拠しない。第2に、歴史的・政治的文脈を無視する傾向がある。第3に、その方法論とより広い理論的枠組みの双方に批判的でない。第4に、テロリズム研究の多くは国家の視点から、既存の秩序の正当化に終始する傾向がある。こうした「静態的アプローチ」では、既存の秩序が政治的暴力にいかに寄与しているかについてはしばしば見逃されている。

これらの課題に対して著者は以下の方法を採用するとしている。第1にフィールド・ワーク、インタビュー、ハマースの文書に依拠した分析を行う。第2に社会運動アプローチを採用し、特にMcAdam らが提示した3つの分析レベル［McAdam, McCarthy and Zald 1996］――ハマースを取巻く政治的・社会経済的構造（「政治的機会」）、組織的な強さ（「動員構造」）、そしてイデオロギー的要素（「フレーミング・プロセス」）――を分析枠組みとして用いる。地域的特殊性を無視する危険については、「多元主義」の立場――「宗教」「世俗」「民主主義」などの概念が特殊西洋的文脈に埋め込まれていること［cf. Asad 2003］を意識してオルタナティブなそれらのあり方を想定する――を採ることで慎重に対処する。第3に、適切な理論的パラダイムを援用して実証研究を強化する。第4に、テロリズム研究において支配的である問題解決アプローチを越えて、国家、反乱、政治的暴力の概念に対する批判的なアプローチを自覚的に採用する。ここで、研究とは根本的に、決定的な裁決であるより、対話に貢献すべきもの、との著者の立場が明らかにされる（p. 14）。

本書の目的は、特に1997年～2007年の時期を中心として、ハマースの政治思想と実践における

民主主義、宗教、そして暴力の役割を説明することであり、特にハマースがどのように権威を概念化し、実践しているかに焦点を当てるとする。その中で政治行動はその政治理論の徹底的な理解なしには完全に理解することはできない、すなわち「特に何が『本物の』イスラーム的政治行動を構成するかについての理想に関する認識が、現実の実践を自覚的に形作るのである」（p. 16）と強調する。以上を踏まえて各章を以下に概観する。

第2章「起源と展開」は、1940年代の同胞団のパレスチナ支部開設から2006年選挙でのハマースの勝利までを対象として、特に政治的機会の変容がいかに今日のハマースを形づくってきたかを分析している。第1にハマースは環境が生み出したと言いうること、第2に同運動を形づくってきた政治的・社会経済的構造と運動内部のダイナミクスの両方が、多数の対立する圧力に影響されてきたこと、第3に後述の民主化と社会運動に関する理論を信用するならば、ハマースの選挙への参加はメンバーを社会化し、その民主主義の原理に対するハマースの態度に影響を与えたと言いうるということを挙げている。それぞれの点は続く各章で詳細に論じられる。

第3章「ハマースの政治哲学」は、「自覚的にイデオロギー的組織」であるハマース（p. 55）の「イスラーム国家像」をめぐる政治理論を、指導者たちへの詳細なインタビューを通じて明らかにする。その中で西洋の政治哲学との比較も含めて分析している。特に権威の源泉として人民の意志を尊重することと、イスラーム国家を望むようそのまさに同じ人民を教育しようとすることとの間の緊張関係――すなわち「段階主義」の帰結――がいかに扱われているかを議論する。その中で、人民主権の概念は神の主権によってバランスがとられているものの、決して無効とされてはいないことが示される。

第4章「ハマース内部の権威」は、同運動の意思決定プロセス中に見られる公式・非公式の制度に着目し、複数の種類の権威が、内部議論の過程でいかに絡み合い、補完し合い、政治的実践にいかなる帰結をもたらしているかを社会学的に説明している。ハマースでは広範な草の根からの協議と選挙によるリーダーシップ選出という公式の制度が機能しているが、その背景として、組織内で議論することのできる枠を設定する非公式の制度の一部である、指導者たちの象徴的資本の存在が明らかにされる。たとえば彼らの宗教に関する知識、敬虔さ、自己犠牲は、支持者からの信頼につながり、それが支持者から客観的に評価される機会を減らすことにより、公式の委任を経ない意思決定を許容する雰囲気を生み出す。またイスラエルの軍事的脅威が存在し続ける現状において、軍事部門の暴力を加える能力、あるいはそのような部門を抱える組織に属していることも、同様の効果を生むとする。

第5章「ハマースと選挙」は、2004年以降の地方自治体選挙と2006年の第2回立法評議会選挙を事例に、ハマースの政治参加をめぐって同運動と社会が相互作用する過程で世論、宗教、暴力が役割を果たす役割について明らかにしている。ハマースは世論に沿うことで明確に得票最大化路線を採っていること、ハマースによる効率的な社会事業が世俗的資源と宗教的資源を結びつけることになり、イデオロギー的な違いを超えて支持を獲得したこと、その軍事部門が暴力を加える能力を維持し続けることで組織全体の信頼性を高めていることが示される。

第6章「ハマースと和平プロセス」は、和平プロセスに対するイデオロギー的拒絶と実際に行われてきた停戦のダイナミクスについて詳細に分析することで、宗教、武装闘争とそれに対する世論の変化、ハマースの政治参加が同運動の実践をどのように形づくってきたかが論じられる。その中で、ハマースの武力行使の決定は世論の動向にかなり依存しており、そしてイスラエルの軍事侵攻等と呼応して世論は大幅に揺れ動くため、世論の尊重ないし世論への迎合は必ずしもハマースの「穏

健化」を促すものではないとする。また武力行使は対イスラエル関係のみならず、パレスチナ内部のファタハとの権力闘争、ハマースの政治参加などの要因が複合された結果だと主張する。

第7章「民主化とハマース」は、パレスチナ社会の構造的変化とそれを反映してきた同運動の支持層が、民主的実践を社会で推進する勢力となり得るかについて、また占領下の市民社会におけるハマース系諸組織の活動がパレスチナの民主化にいかなるインパクトを持ちうるかについて、民主化と社会運動理論を援用して考察している。そもそもハマース支持層の中心は都市に住む高学歴の低中流層にあり、彼らが民主化を要求する中心的勢力たりえ、組織内部で行われている民主的な意思決定では、民主主義に親和的な方向でメンバーが社会に影響を与える可能性があることを示している。だが他方で、ハマースが政治的暴力に関わり続けていることは、暴力を許容する方向でメンバーが社会に影響を与えることになり、自治政府とパラレルな形でハマースが展開している社会事業を通じて（自治政府が希求するような）民主的価値とは必ずしも同じでない価値を社会に浸透させることになる可能性もあることになる。

結語では、各章の内容をまとめた上で、第1章で論じられた方法論的課題が確認される。

*

ここで本書の意義として挙げられるのは、第1に、ハマースに関する研究が近年急速に充実してきた中で、中心的に扱われてこなかったものの極めて重要な論点について説明したことである。その中でも同運動の政治哲学や権威構造を分析した部分が特に優れている。それは、ガザでの調査の中で、既に暗殺されている指導者たちや、安全上の理由からインタビューが困難な普通のメンバー・支持者たちに対して広範なインタビューを行ったことの極めて貴重な成果である。

第2に、ハマースの政治的実践を、組織内外の相互作用の中で常に再解釈される宗教、民主主義、暴力の役割から動態的に説明したことである。既存の研究では、著者も批判するように、思想と実践はしばしば別々に研究されており、その間の相互作用については「動態的である」と主張されるにとどまっていた。それを本書は正面から分析の対象とし、実際に説得的な説明を提示した価値は極めて大きい。

第3に、以上のような本書の成果は、ハマースやパレスチナ政治、和平プロセスだけでなく、政治と宗教、政治的暴力といったより広いテーマに対して貴重な示唆を与えているという点である。説明に必要な理論を適用し、ハマースを他の組織、地域との比較分析の俎上に乗せたことは、しばしば記述的なものにとどまりがちなハマース研究における重要な成果である。

このように、研究のテーマや方法において独自性に富み、内容的にも優れている本書は、Abu-Amr、Hroub、Mishal と Sela、Tamimi らの研究と並んでハマース研究の基礎文献となることは疑いを入れない［Abu-Amr 1994; Hroub 2000; Mishal and Sela 2000; Tamimi 2006］。

しかしながら、本書によってハマース研究が完結したとは言い難い。ここで本書の成果を踏まえた上で、今後の課題として以下の点を指摘しておきたい。第1に、本書でなされたような、現地での調査を中心にすえた実証研究の更なる進展である。同運動に関しては、国際問題としての「パレスチナ問題」の枠組みから、また「パレスチナ問題」の「宗教問題化」という巨視的な観点から論じられる。そうした議論は、分析レベルを分けず、実証を欠いた印象論にとどまりかけている。運動体としてのハマースの背景を説明するためには、一つの要因を過度に強調することなく、今後も現地での実証データを積み上げていくことが不可欠であろう。

第2に、最新の理論の研究動向を押さえた上で、理論を検証し、理論構築に資する研究の促進である。本書は、上述のように歴史記述に偏ったハマース研究の中で、理論を適用する形でハマー

スを説明する画期的な試みである。しかしながら、著者が用いる理論はほとんど1970年代から90年代半ばのもので占められており、今日の眼から見るといささか古くなり説得力を欠くものも含まれている。社会運動理論に関して著者が枠組みとして用いているMcAdamらの研究［McAdam, McCarthy and Zald 1996］は、社会運動研究の複数のアプローチ、特に政治的機会構造を重視する政治過程論、動員構造を重視する資源動員論、認識枠組の交渉過程に着目するフレーミング論の間の隔たりを架橋する最も初期の試みにあたる。さらに言えば、それを用いたという第2章の分析は、政治的機会構造からの説明にほぼ終始しており、動員構造やフレーミングは他の章で触れられるものの、そこでは別の理論による分析がなされ、バラバラの印象を受ける。民主化理論についても、今日ではあまり中心的に用いられない古典的な政治発展論や政治文化論による分析に終始している。詳細な事例研究は新たな変数の発見に役立ち、その成果を理論構築に生かすことができるが［cf. Bennett and George 2001; Van Evera 1997］、それには最新の理論の研究動向を押え、理論の適用にとどまらず検証する試みが不可欠であろう。

第3に、パレスチナ政治の動態を全体的に扱うことによるハマース研究の進展である。ハマース内部の動態を正面から扱ったことが本書の最大の意義であるが、他の政治勢力との間で行われてきた勢力間の境界線の引き直しの過程は未だ明らかにされていない。同胞団時代以来の世俗主義諸派との境界線は、占領下の社会変動や、インティファーダ、冷戦の終結、和平プロセス、第2次インティファーダ等の政治的契機により度々再定義されてきた。そうした過程を経て、今日のハマースは、イデオロギー的に極めて多様に構成されている。このような政治社会変動の中で、政治的な境界がいかに変化し、運動を変容させるかについての本格的な研究が期待される。また、第7章「ハマースと民主化」は、民主化というより民主的過程のみを対象としている。著者は、本章の関心は社会構造の変化がいかに社会運動に影響したかということであるため、民主化における「国家性」問題［Linz and Stepan 1996］は重要ではないとした（p. 245）。しかしながら、ハマースと民主化について論じるのであれば、パレスチナ政治を特徴づける「国家性」問題――その中でも「領域に存在する組織が主権国家として承認されないときには、民主主義に対する厳しい制限となる」という問題――は決定的に重要である。著者が論じるように、パレスチナ社会で民主主義に親和的な価値が広まり、ハマースという「反体制」勢力が選挙で勝利したという事実があっても、その民主的選択が外的権力から事実上反故にされるのでは、その事実の重要性は低まらざるをえない。それゆえ、ハマースと民主化の関係を論じるには、パレスチナ政治全体を取り巻く動態をより重視することが必須であろう。

以上の点は、本書の問題点であるというより、むしろ今後のハマース研究を実り多きものにするための課題である。今後もパレスチナ政治の動態を説明すると同時に、政治と宗教、政治的暴力、紛争、民主化といった研究領域に新たな論点を示唆できるようなハマース研究の進展が期待される。

参照文献

臼杵陽 2004『世界化するパレスチナ／イスラエル紛争』岩波書店 .
小杉泰 1994『現代中東とイスラーム政治』昭和堂 .

Abu Amr, Ziad. 1994. *Islamic Fundamentalism in the West Bank and Gaza: Muslim Brotherhood and Islamic Jihad*. Bloomington: Indiana University Press.

Asad, Talal. 2003. *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*. Stanford: Stanford University Press.

Bennett, Andrew and Alexander L. George. 2001. “Case Studies and Process Tracing in History and Political Science: Similar Strokes for Different Foci,” in Colin Elman and Miriam Fendius Elman, eds., *Bridges and Boundaries: Historians, Political Scientists, and the Study of International Relations*. Cambridge, Mass.: MIT Press, pp.137–166.

Hroub, Khalid. 2000. *Hamas: Political Thought and Practice*. Washington DC: The Institute of Palestine Studies.

Klein, Menachem. 2007. “Hamas in Power,” *Middle East Journal* 61 (3), pp.442–459.

Levitt, Matthew. 2006. *Hamas: Politics, Charity, and Terrorism in the Service of Jihad*. New Haven: Yale University Press.

Linz, Juan and Alfred Stepan. 1996. *Problems of Democratic Transition and Consolidation: Southern Europe, South America, and Post-Communist Europe*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.

McAdam, Doug, John McCarthy, and Mayer Zald. 1996. “Introduction: Opportunities, Mobilizing Structures, and Framing Processes: Toward A Synthetic, Comparative Perspective on Social Movements,” in Doug McAdam, John McCarthy, and Mayer Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.1–20.

Mishal, Shaul and Avraham Sela. 2000. *The Palestinian Hamas: Vision, Violence, and Coexistence*. New York: Columbia University Press.

Nüsse, Andrea. 1998. *Muslim Palestine: The Ideology of Hamas*. Amsterdam: Harwood Academic.

Stedman, Stephen John. 1997. “Spoiler Problems in Peace Processes,” *International Security* 22 (2), Autumn, pp.5-53.

Tamimi, Azzam. 2006. *Hamas: Unwritten Chapters*. London: C. Horst & Co.

Van Evera, Stephen. 1997. *Guide to Methods for Students of Political Science*. Ithaca: Cornel University Press.

（清水　雅子　上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科地域研究専攻）

Sayyed Misbah Deen. 2007. *Science Under Islam: Rise, Decline and Revival*. United States: Lulu Press.

近年顕在化しているイスラーム復興の動きの中で、西洋が発展させてきた科学的知識をイスラームとしていかに取り込むみうるかという議論が盛んになっている。このような議論は「知のイスラーム化」（“Islamization of knowledge”［Sardar 1989: 8］、日本語訳は［小杉 2007］による）と呼ばれる。これは、西洋近代的な知識や科学をイスラームの規範に適した形で再構築しようとする試みであり、政治・社会におけるイスラーム復興とも連動している。自然科学以外の分野では、昨今のイスラーム金融の発展に代表されるようなイスラーム経済も、西洋的な知や技術をイスラーム化する試みと言える。科学の分野における「知のイスラーム化」では、宗教と科学が対立しているという図式は西洋的な発想であり、もともとイスラームにおいてこれらは分かつことのできない知の体系である